

2024 年度 秋学期
教員アンケート集計結果

流通経済大学
FD・SD 委員会

目次

1. 回答者数と回収率.....	3
2. 学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか	5
3. 学生の集中や理解を促す取り組み.....	8
4. 前回のアンケートで提示した改善策の実施状況	12
5. 今後の改善計画	15
6. 特別な配慮が必要な学生への対応	18
補遺（回答者のプロフィール）.....	21

1. 回答者数と回収率

(1) 回答者数

・2024 年度春学期の教員アンケートの回答者数は95名であった。当面の目標として回答者数が100名を超えることを目指していたが、達成できなかった(表1)。

表1 年度・学期別の回答者数

	春学期	秋学期
2019 年度	142 名	127 名
2020 年度	149 名	107 名
2021 年度	144 名	115 名
2022 年度	128 名	88 名
2023 年度	98 名	94名
2024 年度	109 名	95名

(2) 回収率

・2024 年度春学期の教員アンケートの回収率は、29.2%(対象者 325 名のうち95名)であった(表2)。前年度同学期の28.0%から1.2ポイント上昇した。

・専任教員のみに限ると、アンケート回収率は49.7%(対象者 151名のうち75 名)であり、前年度同学期の44.4%よりも5.3ポイント高くなった。

・他方で、非常勤講師のアンケート回収率は11.5%(対象者 174 名のうち20名)であり、前年度同学期の14.6%よりも3.1ポイント低くなった。近年、非常勤講師から回答を得るのが難しくなっており、回収率の低下が続いている。

表 2 区分別の回答者数と回収率

区分	回答者	対象者に占める 回答者の割合
専任教員	75名	49.7%
非常勤講師	20名	11.5%
全体	95名	29.2%

(3) 学部別

・専任教員のアンケート回収率には、学部間で大きな差がある。最も高いのは共創社会学部の69.2%であり、それにスポーツ健康科学部の60.5%が続く。他の3つの学部では、回収率が50%を下回っている(表3)。

・前年度同学期と比べて、共創社会学部・スポーツ健康科学部・法学部では、専任教員のアンケート回収率が上昇した。特に前二者において回収率の伸びが著しい。締切の間に、Eメールで各分科会の委員から同僚の教員に呼びかけてもらったのが効いたのかもしれない。

表3 学部別の回答者数・回収率(専任教員)

	2023 年度秋学期	2024 年度秋学期	変化
経済学部	37.8%	35.9%	↓
共創社会学部	51.9%	69.2%	↑
流通情報学部	56.5%	40.0%	↓
法学部	37.9%	42.9%	↑
スポーツ健康科学部	38.5%	60.5%	↑

2. 授業アンケート(学生アンケート)が自身の取り組みの振り返りに役立っているか

・「授業アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか」という質問に対して、95名の回答者のうち55名(57.9%)が、「とても役立っている」または「概ね役立っている」と回答した。他方で、「あまり役立っていない」または「まったく役立っていない」と回答したのは、9名(9.5%)であった。

表 4 振り返りに役立っているか(回答者数と回収率)

	回答者数	割合
とても役立っている	8名	8.4%
概ね役立っている	47名	49.5%
どちらとも言えない	31名	32.6%
あまり役立っていない	6名	6.3%
まったく役立っていない	3名	3.2%

・「とても役立っている」または「概ね役立っている」と答えた者の割合は、前年度同学期と比べて14.4ポイントも減った。授業アンケートに関して肯定的な評価をする者の割合が大きく減ったのは、「どちらとも言えない」を選ぶ者の割合が25.7%から32.6%に増えたことによる。

・新型コロナウイルス感染症が流行していた期間と比べると、「とても役立っている」または「概ね役立っている」と答えた者の割合はかなり低くなった（表5）。現在は、ほとんどの科目の授業が対面で行われ、教員は学生と直接的にコミュニケーションをとることができる。また、ミニッツペーパー等のアンケート以外の手段で、学生から情報を得ることもできる。上記のような事情で、授業アンケートの重要度が低下しているのかもしれない。

表5 「とても役立っている」または「概ね役立っている」と答えた者の割合

	春学期	秋学期
2019 年度	71.8%	70.1%
2020 年度	82.5%	80.4%
2021 年度	78.5%	81.7%
2022 年度	81.3%	73.8%
2023 年度	75.5%	72.3%
2024 年度	64.2%	57.9%

(1) 教員アンケートに対する肯定的な意見

- ・自由記述の回答に、授業改善に役立つ意見がある。
- ・授業の仕方や興味を抱いた回に関するコメントを自由記述欄に書いてくれる学生がいて、その内容を参考にして次年度のシラバスを直すことがある。
- ・Through the student survey, I learn what they think about my course, which helps me improve it.
- ・学生の視点から自分の講義を振り返ることができる。
- ・レーダーチャートで学生の評価を確認でき、授業の振り返りと今後の対策について検討がしやすい。
- ・授業内における学生との直接的なやり取りで、学生の反応はある程度把握できるが、アンケートで収集されたデータは数値として明確に提示される。
- ・学生が授業時間外にどれぐらい学習しているのかを把握したり、授業の進度が適切かどうかを判断したりするのに役立ちます。
- ・アンケートの結果を見て、授業外学習時間を増やすために課題を増やした。

(2) 教員アンケートに対する否定的な意見

- ・回答する者が少ないので、正確に学生の考えを捉えることができていない。
- ・全般的に回答者数が少なく、回答者に偏りがある。
- ・授業中に回答をする時間を設けても、回答数は伸びませんでした。
- ・未回答の履修者がどのように考えているかわからない。回答してもらったアンケートのみで授業を振り返るのは難しい。
- ・アンケートに答える学生の姿勢にばらつきがある。
- ・熱心にアンケートにとりくんでいる者が少ない。
- ・学年が進むと、学生のアンケートに対する関心が薄くなる
- ・匿名でのアンケートであるため、回答者の属性（出席回数や成績）と評価の良し悪しの相関が分からない。

- ・受講者が少ないので、アンケートよりも学生との直接的な対話で情報を得られる。
- ・毎回の授業で、manaba を使って振り返り・確認・感想などのフィードバックを得ている。それを利用して、授業を進行しながら、修正や進行速度・難易度の調整をしている。回答者が少なく一般的な項目による授業アンケートよりも役に立つ。

(3) 改善提案

- ・アンケートに回答するよう学生に連絡をしたが、回答者が 0 人の科目が多かった。マークシート形式のアンケートに戻すことも一案かと思いました。
- ・アンケート用紙での実施の方が回収率は上がると思います。
- ・授業や教員の取り組みについて尋ねるよりも、学生自身の振り返りになるようなアンケートが望ましい。
- ・「授業評価」ではなく、学生の「自己評価」にした方が、こちらが得られる情報量も増えるのではないか。

3. 学生の集中や理解を促す取り組み

観察

- ・対話やリアクション・ペーパーで学生の反応を良く観察しながら進めた。学生の反応は良いときも悪いときもあった。微調整しながら進めることによって、学生に合った良い学習経験となったように思われる。

ペアワーク/グループワーク

- ・小グループやペアワークに取り組むことで、集中とやる気が引き出せると感じている。課題を達成できたかどうかを個別に判断してフィードバックすることで、テンポ良く授業を進められ、学生を意欲的にさせることができる。
- ・ペアワークやグループワークに関しては、最初に各自が課題に取り組み話し合いの土台を作ることによって、よりスムーズで積極的な意見交換が可能になり、理解度の向上に役立っているように思う。

- ・学生同士でのグループワークや発表など、学生が主体的に動く時間を多く取っている。
- ・グループワーク等を取り入れ、相互学習を進めたかったが、モチベーションの低い学生がおり、期待通りに進まなかった。

目標の確認/ワークの方向づけ

- ・授業全体の目的を冒頭に説明するのみならず、各ワークの意図を明確にするよう心掛けた。
- ・授業の最初に各回の目標を提示して確認するとともに、授業の最後に再度確認するようにした。

ゲーミフィケーション

- ・コミュニケーションを重視し、英語が苦手な学生たちも怖がらずに英語を使えるように、ゲーム形式で英単語や文法を学ぶアクティビティーを多めに取り入れた。レベル差があるので、アクティビティーはグループ対抗の形でを行い、学生が互いに助け合えるようにした。

教材

- ・穴埋め式のレジュメを毎回配布したため、授業中の集中力は一定程度保つことができた。また、そのレジュメを試験に持ち込み可としたので、真面目に取り組んだ学生は試験で比較的高得点を取ることができたと思われる。学生アンケートや、小テストに設けた自由記入欄に記入されたコメントを見る限りこの方式は学生からも好評のようなので、今後も継続したい。
- ・外国に興味を持ってもらえるように、スライドや動画で文化や景色を紹介した。
- ・授業内容に関連する博物館などの展示の紹介や、動画を視聴させるなどした。学生の印象に残ったようで、概ね好評であった。また、学生にマイクをむけて積極的に意見を述べる場を作った。
- ・panopto で動画に字幕を付けて、留学生の理解度の向上を図った。無いよりは良かったが、字起こしの精度は高くなかった。

・I use visual materials and try to explain in both English and Japanese.
However, it can be challenging to keep my students focused, especially when they are tired, sleepy, or not interested in the subject.

アクティブ・ラーニング

・学生に英語でクイズを作成させた。アクティブな学びを狙った。良質のクイズができたものの、もう少し全体で盛り上がってほしいと感じた。

・ほぼ毎回即席でグループを作り、課題を与えてそれについてディスカッションをしたりプレゼンテーションをしたりしてもらった。事前に課題を与えて準備してもらい、それをもとにして話し合ってもらったり、当日課題を与えて皆でそれを解いてもらうという回もあった。テーマに応じた内容を考えたり、さまざまな意見を聴くなどの取り組みで、学生からも概ねよい評価であったと思う。

様々な活動のミックス

・講義一辺倒にならないよう、授業の構成に変化を持たせた。途中で問題演習を入れて学生に発言を求めたり、口頭説明だけではなく、映像資料を活用するなど。

・〇〇（体育系の実技科目）では、毎授業後に自ら本時の取り組みを振り返り、評価・採点する時間を設けている。また、それに対し毎週コメントをつけて返却している。コメントを通じてすべての学生とコミュニケーションを取っていると言っている。

・講義の時間を区切り、小テスト、講義、課題提出と一つ一つのコンテンツを短時間にすることで、集中力の維持を狙いました。

学習スタイルの好みの多様性への対応

・全ての授業で動画、資料、穴埋め資料を配布しています。理由は、それぞれ好きな学び方が違うと思うからです。たとえば、動画を見ている学生は100名ほどで日本人が多いです。留学生は資料がいいという学生が多い印象です。

双方向性

- ・学生の集中が切れ始めたと感じたら、学生に問いかけ、発言をさせる。それによって、集中力の維持を図っている。また、すぐに問いかけるようにするため、履修者の名前を覚えるようにしている。
- ・C-learning のアンケート機能を用いて、匿名で授業内容へのコメントや要望を聞き取り、その場で教員がコメントをつけて、双方向性を確保した。
- ・クイックアンケートを取り入れている。学生からは、「アンケートが楽しい。」「他の人の意見が見られて楽しい。」等の好意的な意見が多い。

巡視

- ・日本語の授業でワークシートを配布し、取り組んでもらう中で、できるだけ机間巡視をしながら声がけをした。

フィードバック

- ・レポートを添削して返却することで、徐々に良いレポートが増えることを実感しています。返却が楽しみだという意見もあったので、しっかり受け止めている受講者もいるようです。

空間づくり

- ・複数のスクリーンがある教室で、一つのスクリーンを見てもらえるように、学生の座席をあえて固めて説明しました。二度手間を防ぐことができ、かつ、学生の集中力も保つことができました。

現実世界とのつながり

- ・現実の社会問題と関連づけて、ニュース映像などを随時折り込みながら話しており、学生にも好評だと考えている。
- ・法律の専門科目の授業で、わかりやすい事例を挙げて説明した。

・授業内容に関連する資格試験（教員免許、アスレティックトレーナー）の問題を紹介しています。概ね好評だったと思います。

卒論指導

・卒論指導において、できるだけ個人指導の時間を増やすために、オフィスアワーとは別に時間を設けて、少人数で指導できる体制を組みました。その結果、一部の学生を除き、目標のラインをこえる卒論を期限までに完成させることができました。

不正の抑止

・大教室の授業で出欠登録に関する不正防止策を数回実施しました。不正行為者を洗い出せたのと同時に、出席者のモチベーションの向上・維持に有益だと感じました。

4. 前回のアンケートで提示した改善策の実施状況

教材

・総合的に ICT を授業に取り入れている。テキストのオンライン化が進んできており、音声や映像も授業展開に合わせて微調整が容易になっている。活用できるオンライン教材も豊富である。授業アンケートの結果から、それなりに効果的な活用ができていると思われる。

・今学期は期末試験でレジュメ以外の自筆のノートを持ち込み可とした。こちらが配布しているレジュメ以外に主体的に講義ノートを作成していた学生の努力を評価につなげることができた。また、試験前に「対策問題集」を作成した。自主的な学習の機会を設けることができた。

アクティブ・ラーニング

・外国語会話のクラスにおいて、いつも決まった学生とペアワークさせていることに不満を抱いている学生が一部いることがわかったので、ペアを固定させない方法を取り入れた。

・学生を退屈させないために、ペアやグループを変えながらワークを行った。多くの学生は活動的であったが、集中力に欠け、真面目に取り組まない者もいた。

- ・アクティビティーの種類を増やし、毎時間必ずやるようにした。話を聞いているだけだとスマホを見たり、私語をしたりと集中力が続かない学生もアクティビティーだと参加できていた。また、グループで答えを考えさせることでお互いに仲良くなったり、助け合う姿が見られた。
- ・ワークショップを取り入れました。学生には前向きな授業への参加姿勢がみられたように感じます。これは継続したいと考えています。
- ・課題解決型の授業 (Problem-Based Learning) を行った¹。
- ・講義でもインタラクティブな要素を増やしたいと考えていたが、実際には時間が足りず、こちらが話し続けて終わってしまうことが多かった。
- ・I incorporate cooperative and collaborative classroom activities, but they are difficult to implement in lecture-style classrooms. For my classes, I need a classroom with movable tables and chairs to form groups of four.

反転授業

- ・秋学期は宿題を一切出さず、授業中に成績評価に関係する全ての課題に取り組むように変えた。その結果、ほとんどの学生が授業中に課題に取り組むようになり、クラスメイトの回答のコピーは激減した。
- ・I tried to integrate certain aspects of flipped classroom activities by asking students to complete pre-tasks, but not everyone submitted them.

授業動画

- ・受講生の理解度の差が開いていることに対して、授業を録画し、講義後公開することとした。受講生からは授業内容を再確認できてよかったなどの、意見が多かったので、今後も続けていくつもりだ。

¹ Problem Based Learning (PBL) とは、実世界で直面する問題の解決を通して、知識の習得や問題解決に関する能力や態度等を身に付けることを目指す学習方法です。学習者が自ら問題を発見して答えを見つけるまでの過程を重視しており、問題解決型学習や課題解決型学習とも呼ばれます。知識を詰め込むだけの受け身的な学習ではなく、能動的に課題に取り組むアクティブ・ラーニングの一手法です。

- ・新松戸では留学生の受講者が多いので、Panopto による文字おこし、機械翻訳を反転授業動画作成に活用しました。

- ・評価基準を明確にし、補助学習用動画で実技の内容をくり返し見ることができるようにした。

宿題

- ・授業時間以外の学習時間が短かったが、できるだけ考える課題を出したり、準備が必要な課題を出すことにより、少し改善されたように思う。これからも課題の内容や量など工夫して出すようにしたい。

卒論指導

- ・学部における卒論の必修化に対応して、リサーチスキルの学習を 2 年ゼミで行った。2 年ゼミから自分の担当する 3 年ゼミを選択する学生が増え、互いにプラスであった。

- ・卒論指導において、できるだけ個人指導の時間を増やした。学生が自分の論文全体の流れを説明できるように、毎回目次をもとに何度もディスカッションを行った。終盤で、自分がどんな研究をし、何を書くべきか、しっかりと自覚させることができた。

不正の抑止

- ・私が担当するオンデマンドの授業では、小テストの不正（他の学生の解答をコピーする、生成系AIを使用する）が横行しています。春学期は、多くの不正を摘発しました。ただし、不正摘発と学生への確認作業に膨大な時間がかかります。また、一科目でいくら不正対策を厳しくしても、全学的な対策を取らなければ、意味がありません。そのため、秋学期は、不正摘発は最小限にとどめました。

その他

- ・コロナ以前よりも学生の欠席に対するハードルが低くなっているように感じられる。そのため、今学期もガイダンスや授業内活動を通して出席することの重要性を繰り返し伝えてきた。

5. 今後の改善計画

観察

・学生をよく観察する。自分から話しかけてこない学生には、授業前などに声をかけて、困っていることや進度について質問していこうと考えている。

空間づくり

・学生の座席配置を工夫し、学生同士がよりコミュニケーションが円滑に取りやすいようにし、さらに集中力を高めるようにしたいと考えています。

雰囲気づくり

・ゼミ科目におけるアイスブレイク。春学期からグループワークの機会を充実させる。ゼミへの帰属意識を高めることで、出席率の向上を図りたい。

目標設定

・学期末や学年末にゴールを設定するよりも、学期内でのマイルストーンをこまめに立てようと思う。

集中力の維持

・語学の授業では、携帯の英語辞書機能を使うことを認めていたが、それ以外の目的で携帯を見続けている学生もいた。携帯の英語辞書機能を使う時とテキストに集中する時のメリハリを大切にしたい。

アクティブ・ラーニング

・受講者数に応じて、講義科目の授業においても、演習形式の活動を取り入れる。

・もっと学生同士が教え合ったり、意見交換をしたりする時間を作る。

・I would like to enrich my lessons with games and communicative activities.

・AI 技術の発展が著しいので、語学に関しては学習の意味を見出せなくなっている学生も多い。書く・読むよりも、話す・聞くといったコミュニケーション面の学習を充実させたい。

反転授業

・反転学習を多く取り入れる。

フィードバック

・シャトルカードなど、学生と双方向でやり取りができる振りかえりのためのツールを用意する。

・授業での成績評価には、複数回のレポートを課していましたが、講評を返信できたのは、最後の一回のみでした。毎回講評を返信することで、学生の意欲を高めたいと思います。

授業動画

・manaba を使って、補助教材の動画を自由に見られる工夫を継続したい。その補助教材の動画の内容もブラッシュアップさせていきたい。

・担当するすべての科目の授業を録画し、公開するつもりだ。

外部講師

・ゲストスピーカーとして実務家を招き、授業で学んだ知識をより実践的に考える機会を設けたい。

レポート指導/卒論指導

・グループワークをした後に、それをレポートにまとめる機会を増やしていきたいと思っています。ウェブサイトからのコピペではなく、自分の頭で考える力をつけてほしいと思うからです。

・レポート作成に向けて、「問いをつくる」トレーニングをしようと思う。そのために、日常生活のささいなことも学びのヒントになることを伝えたい。

・（早い段階からの卒論指導として、）2年・3年ゼミで多様な研究アプローチやリサーチ方法の指導を取り入れる。

・卒論指導において、3 年次に目次を完成させ、自身の研究内容を学生にいかに認識させるかに力をいれました。モチベーションを低下させないように心がけたいと思います。春学期が始まると就活の影響を大きく受けるため、春休み中に春学期のおおよその流れを示すようにしたいと思います。

不正の抑止

・外国語の Reading において、翻訳アプリを使わせない、もしくは使っても解答できないような教材を選ぶ。

・オンラインのレポート提出では不正が多発しているので、アナログ化して紙での提出を復活します。

・留学生の中には携帯で出席をいれて、実際には授業に出ず、提出物も他の学生のコピーかと推測されるケースもある。コンピュータ科目という以上、携帯で出席をとるシステムを使わないということは考えていないが、今後は何かしら対策をとらねばならないと考えている。

評価法

・ルーブリック評価方法を採用する。

・グループワークで、自己評価に加えて他者評価を取り入れてみたい。

・コメントを蓄積したポートフォリオのようなものを作成し、進捗や成長を可視化する。

その他

・消極的な参加姿勢の学生に対し、現状では厳しく指導していない。しかし、アンケート回答によれば、一部の者がそれらの学生への厳しい対応を要求しているので検討したい。

・2026 年度から講義時間が 105 分になる。(体育系の科目の授業では、)暑さや寒さ、冬季の日没の早さへの対策が必要である。

・スポーツ教育モデルを適用しようと思う²。

² スポーツ教育モデルとは、スポーツの技術や心身を育てることを目的とした学習指導モデルです。米国の

6. 特別な配慮が必要な学生への対応

(1) 精神的・身体的な障がいをもつ者

- ・合理的配慮の依頼書の内容に沿いつつ、文面化されていない本人の要望を叶えるため、平素より目配りをし、頻繁に対話することを心掛けた。
- ・本人の希望も聞いた上で、可能な範囲での配慮内容を提示し、教員・学生の双方が納得した形で配慮している（席を前にする、途中退室の許可など）。
- ・授業開始時に個別面談し、どのようなサポートが必要になるか、具体的な場面を設定をして細かく対応した。（この場合はこのように対応、別の場合はこのように対応するなど）いくつかパターンを学生とともに想定し対応した。
- ・配慮が必要な学生に対しては、彼らの特性に応じた配慮を行った。たとえば、身体障害により発言に時間を要する者については、当該学生の発言が終わるまでしっかり待つなど、授業に参加できるよう心掛けた。その結果、当該学生の定期試験の成績は良く、授業の内容をきちんと理解していたことがわかった。
- ・ダイバーシティセンターや他の部署、他の教員と情報共有しながら対応しました。
- ・合理的配慮が必要と指示された受講生はいなかったが、心身の不調を訴える学生には、丁寧に話を聞き、欠席や課題の提出遅れなどに配慮して別の課題や補習を行なった。
- ・多動傾向のある学生について、小学生向けの指導スタイルを取り入れることでうまく対応できた。
- ・障がいのある学生のノートテイクの時間を意識しながら講義を進めました。
- ・背景が白い資料をパソコン画面上で読むのが困難という学生に対し、ダークモードとした資料を作成して、希望があった学生以外も含めて誰でもアクセスできるようにしました。
- ・合理的な配慮を必要とする学生については、パワーポイントの資料をしっかりと準備していれば発表しなくてもよいとしました。
- ・心身の状態により欠席が多くなったため、別途 manaba コースを作り、教材と課題（ドリル）の提供を行なった。

Sidentop が提唱した学習指導モデルのひとつであり、スポーツ活動を通じて困難に立ち向かう心やポジティブな考え方、人間の精神面の大切さを教える、自己責任、克己心やフェアプレーの精神を培う、仲間や指導者との交流を通じて、コミュニケーション能力を育成する、豊かな心と他人に対する思いやりの心を育む等の特徴があります。

- ・個別の対応に切りかえ、授業に類似した課題を提示して、やってもらい、それに対してフィードバックを返すことをしました。学生のペースで取り組めたようです。
- ・合理的配慮を必要とする学生が 1 名いたが、その学生は欠席する時には必ず私にメールで連絡してくれたので、対話を通して信頼関係を築くことができたと思う。
- ・授業に出席できないという学生に対して、講義科目では、授業動画を視聴して、課題をメールで提出することで出席の代わりとしました。
- ・実験や心理検査は必ず対面でしてもらっていましたが、休む場合には動画でフォローしていました。焦らず、何回も確認しながら取り組めるのがよかったのか、最後まで授業に参加できました。
- ・登校が難しい学生のために、授業を撮影して動画をドライブにアップロードしていた。
- ・登校が困難な学生に、課題（音声ファイル提出を含む）で対応した。英会話クラスに在籍する学生の Speaking Test および Listening Test は Webex を使用して行った。体調不良、通院や治療の日程の突然の変更があったため、試験日や課題提出日の設定が難しかった。
- ・特別な配慮が必要な学生が 1 名いました。心理的な理由で学校に来られないとのことだったので、メールでやりとりし、オンラインでの課題提出で対応しました。ダイバーシティ共創センターの方も間に入っていただけたので、適切に対応できたと思います。
- ・障がいにより出席が困難であるためリモート講義を検討して欲しい旨の申し出があったが、ダイバーシティ共創センターおよび教務課と協議の結果、対応は行わなかった。グループワークや発表の機会が多い授業の性質上、ある程度の出席は必須である。今後はその旨をシラバスに記載したり、初回講義で説明したりして、より強調して知らせたい。
- ・特別な配慮が必要な学生が、2 科目で合わせて 4 人いた。発達障害、軽度の知的障害、持病のある者たちである。これらの学生については、本人からの希望があれば、小テストの締切を伸ばしたり、再挑戦の機会を与える旨を伝えたが、これらの措置を希望する学生はいなかった。
- ・配慮が必要な学生がいて、個別に連絡をしたが、返答がなかったため、ダイバーシティ共創センターの担当者と相談しながら、課題の提案などを行った。結局、課題は提出されなかった。

(2) 極端に消極的な学生

- ・発言が難しい場合には、成績評価におけるレポート課題の比重を大きくするなど柔軟に対応しました。

(3) 留学生

- ・日本語が不得意な学生に対しては、翻訳アプリを使用したり、英語に訳したレジュメを配布した。

- ・字幕作成機能付き動画を活用した。

- ・留学生に関して、ゼミでは日本語でのレポートやプレゼンテーションで間違っているところについては丁寧に指導するようにした。

- ・日本語能力の低い留学生がいました。コミュニケーションの問題から、授業を休む傾向があるように感じましたので、私からできるだけ声掛けをして、授業のサポートをするようにしました。その結果、授業の出席度も改善されたように思います。

- ・日本語力が低い留学生は、仲間のサポートや、英語でのレポート提出で、一定の学習効果を担保できたと思う。

- ・日本語のクラスで、日本語能力が低いにもかかわらず、授業に出席しない、小テストを受けない、という留学生がいた。授業に出席した際は声がけし、休んだ時はメール、電話かけなど、できる限りアプローチをしたが改善しなかった。

- ・留学生は部活動に入っている学生が多く、授業中も近い位置に座っているため、学生同士での助け合いは見れるが、授業中の私語に繋がるため、授業中の指示は聞きのがしていることが多い。

補遺(回答者のプロフィール)

(1) 区分

専任教員	75名	78.9%
非常勤講師	20名	21.1%

(2) 所属学部

経済学部	22名	23.2%
共創社会学部	23名	24.2%
流通情報学部	11名	11.6%
法学部	15名	15.8%
スポーツ健康科学部	24名	25.3%

(3) 科目区分

専門科目	59名	62.1%
教養科目	31名	32.6%
専門科目と教養科目の両方	5名	5.3%

(4) 着任年数

1年未満	6名	6.3%
3年未満	8名	8.4%
3年以上	81名	85.3%
無回答	1名	1.0%

(5) 講義科目の数

0科目	20名	21.1%
1科目	7名	7.4%
2科目	20名	21.1%
3科目	15名	15.8%
4科目以上	32名	33.7%

(6) 演習(ゼミ)科目の数

0 科目	22 名	23.2%
1 科目	14 名	14.7%
2 科目	15 名	15.8%
3 科目	27 名	28.4%
4 科目以上	17 名	17.9%
無回答	2 名	2.0%

(7) その他(語学、体育実技、コンピューター、教職)の科目の数

0 科目	53 名	55.8%
1 科目	6 名	6.3%
2 科目	6 名	6.3%
3 科目	5 名	5.3%
4 科目以上	23 名	24.2%

(8) 中間期の「学生アンケート」を授業改善のために利用しているか

利用している	45 名	47.4%
利用していない	49 名	51.6%
無回答	1 名	1.0%

以上